

檀信徒・霊園使用者各位に発行しています。

年末に向けて

先日、京都各ご本山共催で「禅心をかたちに」という催しが国立東京博物館で行われていたので行ってきました。禅はお釈迦様に始まり、達磨大師、臨済禅師、そして白隠禅師に至って、現在の我々に繋がっている、そんな流れがよくわかる展覧会でした。以前ご紹介した「慧可断臂図（慧可青年が達磨大師に入門を乞う時、自らの左腕を切り取ってその意気を示したという）」の本物がありました。有名な一休さんの頂相（肖像画）もありました。感動。蘭溪道隆禅師座像の正面に立つと、峻厳を持って鳴らした禅師の顔がふつと微笑まれたように見えました。禅の修行は一見厳しいように見えますが、人間本来の生き方を求めるときこれほど心安らかな世界もありません。微笑みの教え、それが禅。そういえば、気がついたらもう十二月。今年もいろいろありましたね。嬉しいこと、悲しいこと、つらいこと、楽しいこと。様々な出来事が皆様にもあったことと思います。そのたび、私たちの心は右往左往。心コロコロと動き回ります。それが人生、それが情と言うもの。大事なものは後すぐさま心のざわめ

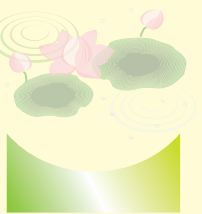
きを抑えることが出来るか、その怒り嫉みの思いに飲み込まれないように出来るか、ということなのです。仏法は決して人間の感情を否定しているわけではありません。泣き笑いあつての人生ですから。大事なものはその後なのです。博物館の目玉は何と言っても宗祖臨済禅師の頂相です。目をむき、拳を振り上げ、大声で「喝ーッ！」と大声が聞こえてきそうです。未熟な私は慌てて合掌礼拝。来年も一生懸命頑張りますッ！

施餓鬼会



今年も秋晴れの中、盛大にお施餓鬼が行われました。本年は参詣の方が大変多く、とても有り難かったです。豚汁甘酒があつという間になくなり、お楽しみ頂けなかった方々、来年はもっとたくさん作っておきます！

法話のコーナー



リオオリンピックが終わりしました。いろいろなシーンがありましたね。「人類最強女子」レスリング53kg級吉田沙保里選手が負けたあと、「お父さんに怒られる」とまるで子供のように純粹に悔しがっている姿。国民栄誉賞の大選手でもやはりマツトの上では勝負にこだわる一選手なんだと思うと、なんだか感動的でした。それから女子柔道70kg級田知本遙選手が金メダルを決めた瞬間の表情がこれまた美しかったですね。なすべき事を果たしたという安堵感なのでしょうか、放心したような、充実感あふれる表情が、これまで歩んできた苦難の道のりを物語っていました。全ての選手たちが、全身全霊を掛けて闘う姿はやはりとても美しかったのであります。

次は東京オリンピック。我々はこれから世界中からやってくる沢山の方々を「お・も・て・な・し」する事になるのですが、はて、でも、おもてなしってどう簡単ではないかな、とも思いうけです。おもてなしって、相手のことをよく知らないとならないはずですから。たとえば友人知人を家に招くとき、その人の好みや性格をよく知っているからこそ「喜んでもらえるように」準備ができるわけで、よく知らない人をそれなりに楽しませるだけなら、それは単なる接待になつてしまいま

す。世界に向けて「おもてなしします」って言っちゃった以上、「接待」ではないけなはずですが、しかし我々が他の国の文化を十分に理解しているとは言いがたい。食材に制限がある国、握手の代わりに両ほほにキスをする国、子供の頭をなでるのが御法度の国もあるのです。真に「おもてなし」するためには、そういう文化の違い、食事や生活様式、言葉の使い方をよく知り、受け入れなければなりません。そうやって充分おもてなししたいのに、日本の文化を知ってもらう、それが本当の意味での国際「交流」になるはず

たえばまず、こんにちは、おはよう、そういう挨拶を知ることが第一歩かもしれません。もともと「挨拶」という言葉自体は、禅の言葉です。この人物はどのような悟りを持っているのかと、相手の悟りの力を推し量るような問答をすることを挨拶、といいました。相手と自分とが理解しあうことは、実のある修行には欠かせない大事なポイントです。力量が上の者はどのように相手を導くか、足りない者はどのようにに教えを乞うか。日本語にもたくさんさんの挨拶の言葉がありますが、その本当に意味を知っておくのも役立つかもしれません。

僧堂修行に入門して二ヶ月ほどたつたころ、「新到正見（しんとうしょうけん）」という行事がありました。これは入門した雲水が初めて師匠である老師と向き合つて「挨拶」というもの

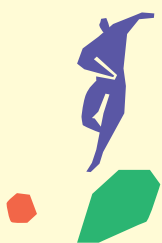
です。衣を改めた私たち新人同期7人は客間に通され、程なく老師がやつて来ると、一同低頭平伏。そのまじつと待つていると、ついに老師がぼそりと「顔を上げなさい」。おそろおそろ身体を起こし、この時初めて老師の顔を正面から見ることになりました。老師は我々7人の顔を一瞥すると「うん、がんばんなさい」と一言だけいい、さーつと奥へ引つ込んでしまいました。私たちは、拍子抜け。しかし先輩は「俺らのときは、うん、だけだからな。見込みがあると思つて下さつてるんだよ」そういったのです。

もとより禅の道場では本来、言葉を「発する」ことはほとんどありません。しかし老師は、いまだ坐禅さえまともに出来ず、くじけそうにもなる私達の心を一瞥で見抜き、どのように導くかお考えになつたのでしょうか。そこであえて一言「がんばんなさい」そう発せられたのです。この一言は大きく胸に強く響きました。いかにも禅宗らしい鮮烈な挨拶の経験でした。

老師様ならイザ知らず、凡人である我々に「相手の力量を推し量れ」というのはなかなか難しいものです。しかし私達には、「挨拶の言葉」という大きな武器が

あります。おはよう、こんにちは、ありがとう。その言葉を聞くとき、相手方がどんな思いなのか思いを馳せ、自分が挨拶の言葉を言うとき、どんな受け取り方をするだろうか、思いを巡らせる。相手を思うことを「おもいやり」といい、自分と相手と互いに思いやるとき、双方の距離がぐつと近づき、自他一如（じたいちにょ）となる。そうすれば相手がして欲しいことと、じぶんのしてあげたいことがピタリ一致する。それがホントの「お・も・て・な・し」というものになるのではないのでしょうか。

次のオリンピックまであと四年。時には言葉を駆使して最大限相手を思いやり、自他一如の心を見せることができるでしょうか。その心意気があつて初めて、おもてなし、が出来るのです。唯々「歓迎します」というだけでは底の浅い接待になつてしまいます。あらゆる人々に本当の意味での、おもてなし。それは文化の違いを越えて喜ばれるはず。その時まで、せいぜい我々は、日常生活の中で、世界の文化風習を学び、また挨拶をすることで相手を真に思いやる、そういう訓練をしておかねばなりません。あと四年。もう四年。良い機会ですから、とりあえず、身近な人にご挨拶することから始めてみましょう。



仏事に関する よもやまばなし



前回、有名な釈迦涅槃図をもとに、現代のお葬式は、お釈迦様と同じように送って差し上げるようになってきている、そんなお話を致しました。今号も引き続き、涅槃図ご覧戴きながら進めたいと思います。

様々な涅槃図がある中で、必ず描かれていなければならぬ図案がありますが、現代のお葬式にもその名残があるのが四本の沙羅双樹です。一本から二本の幹が伸びているので双樹と呼ばれます。横たわるお釈迦様の周りを囲んで咲き誇る真っ白な花。草木でさえも偉大な師を失った悲しみを悼んでいるのです。今では紙花（しか）としてお葬式の祭壇に飾られ



ています（写真参照）双樹ですから、必ず一本の茎から二本の花が伸びているように作られます。

お釈迦様の足下を見てください。おみ足をなでさする老婆が描かれています。この人はビンガの老女といわれ、近隣に住んでいたおばあさんだそうです。ありがたい説法を聞こうとやってきたものの、残念ながらお釈迦様は既に亡くなっていた、そのあまりの悲しみと、何故もつとはやく教えに触れる機会を作らなかったのか、その後悔の思いからおみ足にとりついて泣き崩れているのです。禅の世界では「人として生まれ来ることは難しいものだ。さらにその中で仏法を聞くことが出来るのは大変に有り難いことだ」と言われます。

ビンガのおばあさんのように後悔しても遅いのですから、今のうちに出来るだけたくさんのお教えに触れて戴きたいものです。必ず描かれる人物にもう一人、摩訶迦葉（まかしょう）尊者がいます。この方はお釈迦様が生前から自身の後継者として指名していた人です。当時、老齢のお釈迦様に替わって布教の旅に出ておられました。旅の途中でお釈迦様の訃報に接すると、あわてて師のもとに駆けつけるのですが、七

日間かかってしまった。その間、侍者のアナウンダをはじめ臨終に立ち会うことが出来た者たちが、御尊体をお守りしながら迦葉尊者を待ち続けていました。現代のお通夜では、灯明と線香の浄香を絶やさず、お体をまもって夜通し過ごします。実は摩訶迦葉尊者の到着を皆で待っていた、この七

日間を一晚に短縮したのがお通夜なのです。自分の死に当たってお釈迦様は、御遺言を残されませんでした。「皆で争って盛大な葬儀をする必要は無い、当たり前の葬儀をし、当たり前に送っておくれ。その後は、皆、修行を怠らぬようにしなさい」

近年は葬儀式の短縮や簡素化を当然のように勧める風潮もあるようですが、大事な人を送る「あたりまえ」の作法を知って戴き、その上で現代の葬儀を考えて生きたいものです。

法事のススメ

年忌法要は、亡くなった方に思いを馳せ、自分が今日あるのが先祖のお陰であると改めて思い至る良い機会です。数年に一度ですから、背筋を伸ばしてご先祖様と向き合う時間を是非お持ちいただきたいとおもいます。

法事を行う際によく頂く質問

①人数が少なくて・・・

「参加人数は関係ありませんよ。来れる方だけで良いですよ。遠慮なく」

②何を持っていけば・・・

「お位牌と、あればお写真。それからお供え物ですね。お供えはご本尊様にお花をひと束、それから菓子や果物が多いです。個人様の好物をお持ちになってもいいですよ」

③時間はどれくらい？・・・

「だいたい30分前後です。納骨がある場合は移動時間を含めて一時間から一時間半位です」

④何を着ていけば良いですか？

「喪服でも平服でも結構ですよ。家族だけなら普段着でもいいですが、仏さまの御前ですから、ジーパンTシャツや、派手な服は避けて頂きたいところです」

⑤お寺以外でも出来ますか？

「もちろんです。自宅や墓前、霊園の礼拝堂や集会所などでも、大丈夫。場所困ったらご相談ください」

⑥お布施は・・・

「うーん、お気持ちですから、決まっていなくていいです」

{す} あいうえお用語辞典 (すわる)

禅僧に「すわれ」というと皆、坐禅します。座るはただ腰掛けることですが、坐るは修行です。足を組んで身体を安定させ、姿勢を正して坐ると自然に心が落ちついて

て来る。心が落ち着くと迷っていたこと、悩んでいたことが実はたいした事ではなかったことに気づく。気づくと身も心も軽々。これが坐禅。



涅槃図

お知らせ

この「宝泉寺報」は、霊園使用者の方、檀信徒の方々にお配りしておりますが、最近、親戚や、子供の家にも送ってほしいというご要望がありました。そこで、ご希望があれば各家のお施主さん以外の方にもお送りしたいと思います。送ってあげたい人の名前、住所、ご自身との関係（子、孫、友人など）を添えて、HP、メール、FAX、お手紙などでご連絡ください。

宝泉寺 〒193-0944 東京都八王子市館町 344
TEL/FAX 042-661-3353 アドレス info@housenji.net

平成二十九年	年忌表
一周忌	平成二十八年
三回忌	平成二十七年
七回忌	平成二十三年
十三回忌	平成十七年
十七回忌	平成十三年
二十三回忌	平成七年
二十五回忌	平成五年
二十七回忌	平成三年
三十三回忌	昭和六十三年
五十回忌	昭和四十三年
一〇〇回忌	大正七年

が：よければ気軽に電話などでご相談ください。⑦気をつけることは・・・

十二月に入り日中暖かくなって朝夕の冷え込みが厳しくなってきましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

霊園だより

この年末年始共に管理事務所では、お花お線香をご用意して皆様をお待ちいたしております。ぜひご利用ください。また、墓参りに気になった、外柵のズレや目地のカケなどの修理、墓地工事の事はもちろん、墓石クリーニングも承っておりますので、とりあえずのお見積もりだけでもお気軽に管理事務所にお問い合わせください。

皆様の益々のご健康をお祈り申し上げます。管理事務所 畑山

オススメ図書

今年平成28年は宗祖臨濟義玄禪師の千五十年の遠忌の年でありました。これを記念して本派南禅寺派管長中村文峰老大師が連続記念提唱を行い、その書籍化が今回オススメの「臨濟録提唱」です。臨濟録は臨濟禪師の教えを書き残したもの。この千年以上前の禅籍をわかりやすく解説しています。難しい言葉は個別に詳しく注釈されているし、一見難しい内容を老大師の様々な体験を元にした解説でとても面白く読みやすくなっています。内容を理解しようとして読むのもアリですが、禅の修行の世界の二オイを感じて頂くだけでも、読みでのある名著です。

春秋社2000円

